

「ピア・サポート 他者から認められる喜びを学ぶ」

『学校でできる対人関係スキルトレーニング』児童心理 2010年10月号臨時増刊

対人関係スキル・トレーニングの理論と方法

人間関係の基礎をつくるプログラム

ピア・サポート

■他者から認められる喜びを学ぶ

国立教育政策研究所総括研究官

滝

充

日本のピア・サポートプログラム

「日本のピア・サポート・プログラム」は、欧米のピア・サポート活動に輸入されて生まれた日本型ピア・サポートである。日本の子どもの実態を踏まえ、日本の伝統的な教育観に立って開発された実践という意味合いで、そう名づけられた。子どもが主体となって自己有用感を獲得する過程を（大人は間接的に）支援する教育活動であり、大人が主体とな

って（子どもに直接的に）対人関係等のスキルを教え込んだりはしない。だが、結果的に子どもの社会性（スキルも含む）が育つことは、客観的なデータで繰り返し証明されてきた。

ちなみに、欧米型ピア・カウンセリング（別名、相談活動に基づくピア・サポート）と異なることは、その名称からも理解できよう。ただし、日本のそうした取組は、相談やカウンセリングの語を隠し、単にピア・サポートとのみ称しているため注意が必要である。欧米とは教育

制度等の異なる日本で、小中学生にカウンセラー役をさせるのは危険すぎる。

また、ピア・サポーターを任命して活動させる欧米型ピア・サポート用のスキル訓練に着目し、サポーター活動なし（訓練のみ）でピア・サポートと称する日本の実践とも異なる。かつて自然の中でチャレンジする体験を通して子どもの成長を促した活動が、名称は変えないまま屋内で手軽に実施できる疑似体験の手法に矮小化された例がある。それと同様、名称が同じだけで、実践の根拠も目的も効果も、すっかり変質している。

話を元に戻そう。いわゆるスキル訓練との違いは、大人が子どもにどのように働きかけるかという点に端的に現れていると言つてよい。「日本のピア・サポート・プログラム」の場合、大人の役割は、子ども白らが変わっていくための場や機会（下級生のお世話活動や職場体験等の実体験）を準備し、その事前学習・事後学習で子どもを支援していくことに尽きる。スキル訓練のように、大人が子

ともにエキササイズ形式の疑似体験を直接に提供して行われる「治療的」(もしくは「開発的」)な働きかけとは異なり、あくまでも子ども主体の活動を大人は支援するだけという「教育的」な働きかけである。別な言い方をすれば、「形を与え」るのではなく、「心が育つ環境を整える」ことを目的とした働きかけなのである。

訓練が有効な問題なのか

筆者は、いじめや不登校の問題に対して、数十年前から実証的な調査研究を続けてきた。そして、いくつもの学校や教育委員会に協力し、そうした問題の解決にもあたってきた。そうした経験から得た知見は、今の子どもに見られる問題現象を表に現れた形で判断したり対処したりするのは危険、ということである。

表に現れた現象からはスキルの欠如という問題に見えても、発達途上にある小学生や中学生の場合、その時点ではまだ精神が十分に育っていないだけというこ

とも多い。もちろん、原因が未熟・未発達であろうと、年齢相応のスキルが身につけておらず、期待された行動を適切にとることができないことは事実である。しかも、ときには「発達障害」というレッテルを貼りたいくらいかも知れない。

だが、個別の障害等が原因でないなら、彼らの精神の未熟・未発達の原因は生活体験や社会体験の乏しさにある。そうであるなら、小中学生くらいまでに体験小屋を構う実体験の場や機会を提供することで、子どもは自らの力で問題を克服する。彼らは開花こそしていないものの、自ら精神を発達させられる力を潜在的にもっているからである。その点で、個別の障害等をもつ子どもとは異なる。逆に言うと、こうした子どもと障害等をもつ子どもを同じに扱うべきではない。

だが、そんな彼らに実体験の場や機会を提供しないまま、疑似体験の訓練だけで目先の問題(スキルの欠如)を手っ取り早く解消することに終始するとしたら、それは彼らが自ら育つための場や機

会を奪っていることにはかならない。仮にそうした訓練がその時点での問題傾向を一時的に緩和させるだけでなく、彼の発達にまでつながるならともかく、そうした点を検証もしないで、安易に子どもを訓練してすませる発想には問題がある。

対症療法がもたらす弊害

実体験の場や機会をスキル訓練で代用することによる問題は、果たして代用可能なのかという点だけではない。スキル訓練が表面的に効果を上げ、目先の問題だけは解消できた場合、より深刻、より危険な事態をもたらしかねない懸念があり、むしろこちらのほうが大問題と「言える。それは、精神が未熟・未発達のままなのに、表面的には成長したかのように見える(「行動できる」)子どもが作りだされることを意味するからである。

訓練によって表面的な行動が改善された子どもに対し、多くの大人は、彼らの精神の未熟・未発達という根本問題を忘

れてしまう。なぜなら、彼らが表面上は問題を起さなくなるため、「問題を起さないと十分」に成熟・発達したから」と錯覚してしまうからである。たとえば、あいさつをしなかったり、規則を守らなかったりする子どもが、あいさつをし、規則も守るようになれば、心が育つたと判断してしまう。その結果、精神が十分に成熟・発達するために必要な機会を彼らに提供しないまま、否、奪ったまま、彼らを学校から送り出してしまふ。

しかし、精神が十分に成熟・発達していないにもかかわらず、学校にいる時点では表だった問題を起さなくなっただけの彼らが、そのまま社会に出たときにどうなるのか。年齢を重ね、社会にも出たことで、新たな欲求や欲望に目覚めたり、壁にぶつかったりしたとき、それを受け止め、処理できるだけの精神が育っていないかったら、何が起きるのか。

近年、「あいさつがきちんとできる普通の若者だった」とされる加害者が起こす類稀的な事件(言い換えれば、年齢相

応の判断が欠如した行動)が多発している。彼らは、地域や家庭で精神が発達する機会を十分に与えられず、学校においてもそれを補う実体験の場や機会を提供されないまま、表面的な「あいさつ運動」、スキル訓練等の対症療法的な疑似体験等で問題が覆い隠され、発達の際や機会を奪われたまま卒業した「かつての子ども」だったのでないか。

今SNSでもの課題は、

そもそも、スキル訓練の暗黙の前提は、たとえば「知・徳・体」といった面においてはほぼ完成した大人(普通の社会人)のはずである。普通の大人ならうまくできそうなのになに、ちよっとした癖があったり、コッパが飲み込めていなかったりするために、人間関係で失敗したり、成果が上がらなかつたりする。そんな事例に有効な手法として、スキル訓練は評価され、発展してきたはずである。

普通の大人に対する実践にとどまる限り、先に指摘したような弊害を考慮する

必要はない。多少の得手不得手があるとしても、それ以外の面では年齢相応のものを身につけている成人が対象であるなら、スキル訓練で表面的な問題を解決しようとしたことが、別の問題につながる心配はないからである。

ところが、子ども相手の場合、とりわけ今どきの、それも小学生や中学生という発達途上の子どもを対象として訓練を実施する場合には、話が違ってくる。先に書いたとおり、彼らの未熟・未発達が個人的な障害等によるものでないなら、スキルを教えることでも対症療法的に問題を解消しようとするのは、未熟・未発達の問題を表面的に覆い隠し、与えらるべき発達のための場や機会を彼らから奪うことにつながるからである。未熟・未発達な子どもが増えているとしたら、なおさら対応を誤ってはなるまい。

実際、今の子どもは成長発達の状態を見てみると、「知」や「体」に関しては、昔の子どもと比べて二・三歳くらい高い印象ではないだろうか。社会の情報化が

進み、子どもといえども大人と同じような情報を入手できる時代になったことや、家庭生活や食生活が変わり、体格が向上し、運動能力も高まったことなどが、その背景として考えられよう。

しかし、「徳」に関しては、反対に二、三歳くらい低い印象を受ける。地域や家庭が様変わりし、それらの教育力が低下したことが背景にはあり、加えて最近の親が子どもの気持ちに理解を示しすぎること、育つ場や機会が子どもに提供されなくなった。その結果、周りの人々を考慮して行動する、自分のすべきことにきちんと向き合う、自分がしたことをきちんと受け止める等に関しては、あまりにも幼いままの子どもが増えている。

前提となる考え方

「日本のピア・サポート・プログラム」は、そうした子どもの発達過程の姿を見据え、かつての地域や家庭が提供していた体験の場や機会を学校が提供す

るための実践として、次のような考えのもとに開発された。

- ① いじめや不登校増加等の背景にある対人関係や集団内のトラブルは、今の子どもが多くが年齢相応の精神性・社会性を発達させきれないまま大きくなっているためである。
- ② この状況の打開には、他者から感謝された・認められたという体験を通して、集団の一員としての役割を果たすことができるという誇りや自信（＝「自己有用感」）を獲得させることが有効である。
- ③ 一定の年齢に達したすべての年長者が年少者の「お世話活動」等を通して「自己有用感」を獲得できる仕組みをつくることで、いじめや不登校等の未然防止を図ることができる。

この①で示した今の日本の子どもの状況は、家庭や地域において現実の他者とかかわる中で育つ体験が減ったことによ

りもたらされたものと考えられよう。また、②や③を学校の実践として考えるなら、年長者が「自己有用感」を獲得できるように計画された異年齢交流等を実施する、ということになろう。

なぜ異年齢交流が有効なのか、また異年齢交流を従家から行っている学校はそのままで心配ないのかについて、最後に説明しておこう。

異年齢交流の意義

かつての子どもと比べ、今の子どもが大きく失ったものは何なのか。それは、近隣の子どもも集団（ピア・グループ）内の遊びを通して、集団内のさまざまな役割を体験しながら育つ、年長者の行動を役割モデルとして育つ、年長者から面倒を見てもらったという感謝の念と年長者へのあこがれをもって育つ、年少者からのあこがれの眼差しを受けつつ年少者の面倒を見て自己に対する誇りや自信を感じて育つ等の体験であろう。

こうした機会を喪失した今の日本の子

どもの状態は、マズロー⁽¹⁾が指摘するところの「承認の欲求」や、その下位の「所属と愛の欲求」が満たされないうまま育つた状態と見える。そんな彼らが、他人を尊重するとか気遣うとかができないこと、それどころか困りに他人がいることにすら注意を払わず傍若無人にふるまうこと等は、当然のことと見える。

しかも、彼らには他人とかかわる喜びや楽しさを実感した経験がないため、他者を単なる障害物であるかのようにしか受けとめられない。そんな彼らが、より上位の「自己実現の欲求」を達成するよう家庭や学校で刷り込まれたなら、他者を無視したり排除・攻撃したりしながら、

ひたすら自己の欲求のみを満たそうと行動しても不思議ではない。

そんな彼らに、かつての子ども集団における成長過程を再現できるように組み立てられた異年齢の「お世話活動」が効果的であったのは、やはり当然のことと見えよう。ここでは、①年長者は、自分のしたことでも年少者が喜んでくれた、自分のしたことが年少者の役に立ったという実体験を通して、他人から認めてもらえた、必要な存在として受け入れられたという「承認の欲求」を満たし、②年少者は、面倒を見てもらえてうれしかったという「所属と愛の欲求」を満たすとともに、誇らしげな年長者にあこがれ、

「承認の欲求」を自らも抱くからである。だが、単に異年齢の交流活動を行えばうまくいくわけではない。あくまでも年長者が「自己有用感」を獲得できる場や機会を提供する形で実施することが、重要である。そのための具体的な取り組み方は、拙著⁽²⁾をご覧ください。

〔参考文献〕

- (1) A・H・マズロー（著）小口忠彦（訳）『人間の心理学』産能大学出版部、一九八七
- (2) 滝元（編著）『改訂新版ピア・サポートではじめる学校づくり——小学校編』金子書院、二〇〇九